

[ワークショップ]

道徳的に語るということ：非認知的な態度の再検討を通じて

オーガナイザ・提題者	横路佳幸（慶應義塾大学・日本学術振興会）
提題者	小林知恵（北海道大学）
提題者	小林靖典（慶應義塾大学）

一般に、メタ倫理学が抱える主要な課題とは、道徳的な語りや判断、実践の場において、いったいどのようなことが行われているのかを明らかにすることである。たとえば、「面白半分で犬を蹴り飛ばすことは悪い」と我々が道徳的に語るとき、とりわけ存在論や意味論、認識論、行為論といった諸領域から、以下のような疑問が提起されるはずである。

- 悪いという道徳的な性質や、面白半分で犬を蹴り飛ばすことは悪いという道徳的な事実は存在するのだろうか。また、そうした性質や事实在存在するのだとすれば、それはどのようなもので、いかなる仕方で存在するのだろうか。
- 「悪い」という道徳的な語はいかなる意味を持つのだろうか。また、「面白半分で犬を蹴り飛ばすことは悪い」という道徳的な文が真だとすれば、それはいかにして真となるのだろうか。
- 「面白半分で犬を蹴り飛ばすことは悪い」が道徳的な真理だとすれば、我々はそれをいかにして知りうるのだろうか。また、「面白半分で犬を蹴り飛ばすことは悪くない」と考える人々との道徳上の不一致は解消可能なのだろうか。
- 「面白半分で犬を蹴り飛ばすことは悪い」という道徳的な判断は、いかにして理由や実践的推論と結び付き、非難や説得などの行為を動機づけるのだろうか。

大雑把に言えば、これまで提唱されてきた数々のメタ倫理学理論は、こうした一連の問いに適切な答えを与えようとするものにほかならず、その最終目標は道徳それ自体の本性を様々な観点から解明することにある。現在、メタ倫理学が現代の分析哲学の潮流において多くの注目を集め活況を呈しつつあることは、上記の一連の問題圏を比較的馴染みやすく取り扱った国内外の関連著作・邦訳書が相次いで出版されているという事実からうかがい知ることができる（cf. Chrisman (2017); Kirchin (2012); McPherson and Plunkett (2017); van Roojen (2015); ウィギンズ (2014); マクダウェル (2016); ブラックバーン (2017); 蝶名林 (2016); 佐藤 (2017)）。

本ワークショップでは、上記の基本的な問題意識を念頭に置きながら、各提題者（横路・小林知恵・小林靖典）が互いに対立するメタ倫理学理論をそれぞれ提示し、三つ巴になって相互に建設的な批判や闊達な議論を行うことで、「道徳的に語るということ」を様々な立場

から改めて問い直すための土台を形成・提供することを目的とする。その際鍵となる道具立ては、認知的で表象的な信念から区別され、欲求や情動などによって代表される心的状態、すなわち**非認知的な態度（noncognitive attitude）**である。興味深いことに、それぞれの提題者は、道徳的な語りや判断、実践において非認知的な態度が持つ何らかの「重要性」を認めているものの、意味論や存在論等におけるその役割や位置づけ、帰結から見ると、それぞれの考える「重要性」の内実は大きく異なる。そこで、非認知的な態度に焦点を合わせ、そのあり方を多角的に再検討することを通じて、提題者間の対立軸や係争点が具体的にどこに存するのかを浮き彫りにする。これにより、各提題者の支持するそれぞれのメタ倫理学理論の理論的特徴、そしてそれらの間の親近性と相違性をはっきりとさせることができるはずである。さらに、道徳的な語の意味論における非認知的な態度の役割や、非認知的な態度と道徳的な性質の関係性、道徳的な語りや判断の非認知的な態度への依存性等についての実り豊かな議論や示唆を提供することにしたい。

本ワークショップの進行は次の通りである。まず、横路が現在のメタ倫理学における様々な論争状況を簡潔に概観したのち、非認知的な態度の地位や役割の検討を中心として、**表出主義（expressivism）**に立つ小林知恵、**虚構主義（fictionalism）**に立つ小林靖典、**感受性説（sensibility theory）**に立つ横路の順に個人発表を行う。次に、提題者間で相互に質問・討議を行い、最後に質疑応答を行う予定である。

なお、次ページ以降に、**各個人発表の予稿**を掲げる。

参考文献

- Chrisman, M. (2017), *What Is This Thing Called Metaethics?*, New York: Routledge.
- Kirchin, S. (2012), *Metaethics*, New York: Palgrave Macmillan.
- McPherson, T. and Plunkett, D. (ed.) (2017), *The Routledge Handbook of Metaethics*, New York: Routledge.
- Van Roojen, M. (2015), *Metaethics: A Contemporary Introduction*, New York: Routledge.
- ウィギンズ, D. (2014) 『ニーズ・価値・真理：ウィギンズ倫理学論文集』, 大庭健・奥田太郎（編・監訳）, 勁草書房.
- マクダウエル, J. (2016) 『徳と理性：マクダウエル倫理学論文集』, 大庭健（編・監訳）, 勁草書房.
- ブラックバーン, S. (2017) 『倫理的現実論：ブラックバーン倫理学論文集』, 大庭健（編・監訳）, 勁草書房.
- 蝶名林亮 (2016) 『倫理学は科学になれるのか：自然主義的メタ倫理説の擁護』, 勁草書房.
- 佐藤岳詩 (2017) 『メタ倫理学入門：道徳のそもそもを考える』, 勁草書房.

[個人発表]

表出主義と道徳哲学の視座

提題者 小林知恵（北海道大学）

道徳的判断が持つ主要な機能を判断者の態度や感情、欲求などの表出だと考える立場である「表出主義（expressivism）」の妥当性は、長らく現代メタ倫理学上の一大トピックとして盛んに論じられ続けている。現代メタ倫理学においてこの立場の源流とされるのは、20 世紀初頭に登場した情緒主義（emotivism）であるが、種々の批判——道徳的不一致の問題、フレーゲ＝ゲーチ問題、態度の多様性や安定性の問題——に直面するなかで立場の洗練が試みられてきた。例えば、サイモン・ブラックバーンやアラン・ギバードは高階の態度説を採用することによって、これらの問題への応答を行ってきた代表的な表出主義者である。また、彼らの立場を情緒主義から分つ特徴として、あくまでも道徳的判断の主たる機能を態度の表出としつつも、道徳的判断の真偽や客観性についての語りを保持することを目指している点が挙げられよう。道徳的判断の機能を事態の記述に求める「記述主義（descriptivism）」の特権とも思われる真偽・客観性について、表出主義の視座から説明し正当化できるのならば、表出主義は強固な実在論や記述主義に対抗しうる理論として位置づけられるだろう。しかしながら、実在論的・記述主義的な語りを自らの内部に取り込むことにより、この立場に対する新たな批判が投げかけられることとなる。とりわけ、ロナルド・ドゥオーキンやシャロン・ストリートが指摘するように、ブラックバーンが提示する表出主義の理論パッケージに含まれる道徳をめぐる「主観的な源泉」と「客観的な感触」の緊張関係の調停は無視しがたくかつ一筋縄には行かない問題である。

以上の論争状況に鑑みて、本発表では、ブラックバーンの表出主義の意味論を概観し、彼が道徳的問いに応答するための複数の視座——外的な理論的視点と道徳実践に内在的な熟慮の視点——を措定している点を確認する。さらに、一階の道徳的原理にかかる探求において外的な視点は不要であるとするドゥオーキンのアプローチとの同異点に着目することによって、ブラックバーンが考える二つの視座の内実を明確化する。以上の作業を通じて、彼の理論を見通しのよいものとし、それが広義の道徳哲学が依って立つべき探求の枠組みについて独自の方向性を提案することを目指すものであると論じる。

[個人発表]

虚構主義的非認知主義：慣習としての道徳的語り

提題者 小林靖典（慶應義塾大学）

私たちはしばしば存在しないものについて語ることがある。そして、その多くは無益で意味をなさない語の羅列などではなく、それなりの役割をもった有意味な語りとして受け止められている。虚構的な語りはそういった語りの一つであり、そこに属する表現は文字通りに受け止められた場合とは異なる情報を伝えるという点で、特異である。この特異な語りについては、様々な分析がなされており、可能世界意味論に基づいた理解や、虚構文の意味内容に手を付けず、使用法にのみ着目した語用論的理解などがある。

さて、こうした虚構的な語りに関する知見は道徳的な語りにも応用されているということが指摘されうるだろう。このような立場は道徳的虚構主義と呼ばれ、メタ倫理学において一つの地位を築いている。道徳的虚構主義は一般に、道徳的な語りが基本的に虚構的であると考え、道徳の領域に端的な真理を認めない。この背景には、マッキー（Mackie 1977）に代表されるような、特異な特徴をもつ道徳的性質に対する懐疑が存在する。しかしその一方で、道徳的な語りの役割については虚構主義者の間でも意見の統一が図られていない。例えば、道徳的な語りはシャーロックホームズの物語のように、道徳という一つの虚構的物語について語っているのだと考える者（Joyce 2005）や、道徳について語ることは現実世界にあるほかの事象について語る一つの方法であるとする者（Nolan *et al.* 2006）などがある。また、これら道徳的虚構主義理論に共通の問題がいくつか存在する。その中でも大きなものが、道徳的な語りが虚構的であるならば、なぜ道徳的な語りをするのかという問題、そして虚構文と非虚構文の混成文の地位の問題である。

提題者は本発表にて、カルデロン（Kalderon 2005）に倣い、道徳的虚構主義の立場に立ちつつ、道徳的な虚構についての非認知主義的な理解を提出する。それはすなわち、次のような主張である。（1）道徳文が意味内容として表しているのは道徳命題以外の何物でもなく、（2）道徳命題は基本的に偽であり、（3）道徳文の使用は使用者の信念にかかわるのではなく、欲求的な態度の表出にかかわっている。このような立場は以下のような点で、他のメタ倫理学説よりも魅力的である。（a）上述のマッキーに代表されるような非自然的な性質への懸念の解消、（b）動機に関する一つの内在主義との親和性、そして（c）意味論の複雑化の回避である。また、以上のように虚構主義的非認知主義の概要と利点を明らかにしたあとで、前述のものを含め、道徳的虚構主義一般にあてられたいくつかの問題にも解決策が与えられうると論じる。

参考文献

Joyce, R. (2005) *Myth of Morality*, Cambridge: CUP.

Kalderon, M. (2005) *Moral Fictionalism*, Oxford: Clarendon.

Mackie, J. (1977) *Ethics: Inventing Right and Wrong*, New York: Penguin Books.

Nolan, D. *et al.* (2006) “Moral fictionalism versus the rest” in *Australasian Journal of Philosophy*,
83(3), 307-330.

〔個人発表〕

ウィギンズの認知主義の再構成

提題者 横路佳幸（慶應義塾大学・日本学術振興会）

本発表の目的は、デイヴィッド・ウィギンズによって示唆されたメタ倫理学上のいくつかの主張や見解を秩序立てながら整理し、新たな観点からその理論的な再構成を行うことである。

通常、ウィギンズによって示唆されたメタ倫理学上の立場や見解は、ジョン・マクダウェルによるものと並んで、「感受性説（sensitivity theory）」（または「態度の適合説（fitting attitude theory）」）や「新道徳感情学派（neo-moral-sentimentalism）」などと呼ばれる。感受性説によると、道徳的な判断とは、我々から独立に実在する道徳的な性質や事実の直観や、自然的な性質や事実に対する非認知的な態度や反応ではなく、我々の道徳的な感受性に基づいた適切で正しい反応についての信念である。この説は、従来の直観主義や表出主義などに対する対抗理論として考えられ、分厚い概念に代表される信念と欲求の「もつれ」や、色や美に関する判断との類比性などといった数多くの論点や議論を提供することから、多岐にわたる文脈においてその妥当性が論じられてきた。

しかし、ウィギンズの立場を「感受性説」として特徴付けることは決して誤りではないにせよ、そうしたラベルだけでは——これまで主としてマクダウェルの議論の方がより大きな関心と注目を集めてきたという事実も加味すると——ウィギンズ自身が行っている個々の具体的な主張や論証の内実がひどく霞んでしまいかねない。実際、ウィギンズ自身の（晦渋で知られる）言葉を一つ一つ紐解いていけば、それらが多数の興味深い示唆や論点を内包していることに気付くだろう。そこで、本発表の前半において私はまず、主要な考察領域を存在論と意味論に限定したうえで、ウィギンズの主張や論証をできるだけ網羅的に取りまとめ、それらなるべくテーゼの形で確認し整理する。私の見通しでは、少なくとも次の 10 のテーゼを読み取ることができるはずである（これらは、互いに独立というわけではなく相互に絡み合って支持されるものである）。

1. 〔先項不在説〕我々の感受性による反応 R と道徳的な性質 V のペア $\langle R, V \rangle$ は、存在論および意味論の観点から見て、相補的なパートナーであるがゆえ、一方が他方に先行するわけではなく、両者は相互依存的である。
2. 〔人間中心的な実在論〕 $\langle R, V \rangle$ における道徳的な性質 V は、我々の感受性による反応 R に依存し、我々人間の心から独立ではないとしても、実在の一部を構成し「発見」される意味で実在する性質である。
3. 〔賢明な主観主義〕 $\langle R, V \rangle$ における我々の感受性による反応 R は、単なる個々

人の主観的・原初的なものではなく、道徳的な性質 V によってもたらされ、適切でふさわしいような反応、たとえば賢明な評価的な態度や感情である。

4. [弁護的説明] 道徳的な性質 V の実在は、次のような説明によって擁護可能である。すなわち、「 x は V である」という道徳的な信念は、 x が V であると考えられることなく、それゆえに我々人間が x のうちに V を見出すことによって弁護される。
5. [反自然主義] 道徳的な性質 V は、我々人間による倫理的な関心や観点と密接に関わるために、自然的な性質 N には還元されず、原初的で独特な存在者である。
6. [人間中心的な相対主義] $\langle R, V \rangle$ の固い結び付きや発展は、我々人間と類似した生活形式や傾向性を共有する人々に依存するという点で人間中心的で相対的である。
7. [客観主義] $\langle R, V \rangle$ の固い結び付きや発展は、道徳的な信念の収束、すなわち道徳的な判断の真理や道徳的知識の獲得に向かって推理できるという点で客観的である。
8. [認知主義] 道徳的な判断は、通常的信念と同じく、非ミニマリズム的な仕方で真理を問うことができるという点で認知的である。
9. [不定形性] 道徳的な述語の外延は、自然的な性質を表す述語の外延と一致せず、 $\langle R, V \rangle$ の固い結び付きによって決定される。
10. [指示対象の一義性] 道徳的な述語は、文脈によって指示対象を変動させることなく、常に道徳的な性質 V そのものを指示する点で一義的である。

次に、本発表の後半において私は、こうしたウィギンズの主張（とその整理）に対して投げかけられてきた疑問の一部に適切な応答を与える糸口として、それらをいわゆる「ハイブリッド説 (hybrid theory)」、特に「融和的認知主義 (ecumenical cognitivism)」の一種として大幅に再構成することが有効であると論じる。粗く言えば、ハイブリッド説とは、道徳的な判断によって道徳的な信念と非認知的な態度の両方が表出されることを認める立場を指し、その中でも融和的認知主義は、ある判断を道徳的ならしめる最も本質的な要素が道徳的な信念の方だと考える立場である。管見では、この融和的認知主義の枠組みを一部借りることで、上記 1 から 10 の主張をまとめた「ウィギンズの認知主義」は、感受性理論が抱えてきた従来の問題にうまく対処しつつ、現代でも十分に通用する理論として新たに位置づけることができる。最後に、再構成されたウィギンズの認知主義の特徴を浮かび上がらせるため、シャロン・ストリートの精力的な擁護によって近年盛んに議論されている構築主義 (constructivism) と比較検討することで、それが具体的にいかなる意味論と存在論を持っているのかを明確にすることにしたい。